

### 第3 問題作成部会の見解

#### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

「倫理」

人間としての在り方生き方に関わる倫理的諸課題について多面的・多角的に考察する過程を重視する。文章や資料を読み解きながら、先哲の基本的な考え方等を手掛かりとして考察する力を求める。問題の作成に当たっては、倫理的諸課題について、倫理的な見方や考え方を働かせて、思考したり、批判的に吟味したりする問題や、原典資料等、多様な資料を手掛かりとして様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。

「政治・経済」

現代における政治，経済，国際関係等について多面的・多角的に考察する過程を重視する。現代における政治，経済，国際関係等の客観的な理解を基礎として，文章や資料を的確に読み解きながら，政治や経済の基本的な概念や理論等を活用して考察する力を求める。問題の作成に当たっては，各種統計など，多様な資料を用いて，様々な立場から考察する問題などを含めて検討する。

#### 2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 思想の継承と発展を主題とし，教科書に特筆される思想家やその思想を，思想史の中に位置付けて理解できているかを問うた。学習者が個別事項の暗記から思想史の流れに目を向けてゆくリード文を軸としつつ，思想間の影響関係を教科書知識に基づいて問うたほか，現行の教科書では重く扱われないものの，思想史上重要なポイントを，資料とその解説の読解を通じて学習できるような問題を設けた。

問1では，ギリシア哲学がイスラーム世界を経て中世キリスト教世界に継承されたことを示す事例の説明文について，正誤の組合せを問うた。正誤のポイントは教科書知識の範囲内であったが，正答率は低く難問となった。本大問の主題をよく表現した問題ではあるが，問題全体の巻頭である問1が昨年度に引き続き難問になったことについては，今後留意したい。問2では，各領域の先哲らの先行思想への批判について問うた。標準的な難易度であった。なお，④「地上の国」「神の国」の説明がない教科書もあるとの指摘を受けた。問3は中国仏教に関する資料の正確な読解を問う問題であったが，インド仏教の知識も正誤のポイントになったと考えられる。問4ではユダヤ教に対する新約聖書の記述を問うた。正答率は非常に高く，成績最下位層を識別できたに留まった。

第1問全体の得点率は57%であり，理想に近い難易度であったと言えよう。また，ほとんどの問題は高い識別力を示しえた。ただし，外部からも指摘のあった問題分量については，受験者の負担軽減のために，今後より一層留意したい。

第2問 近年のウクライナ危機などの国際紛争，新型コロナウイルス感染症など，人類の生存が大きく脅かされるなかで，「平和」の持つ意味を，学校での学びだけではなく，家庭でも考えてもらうことを狙いとして場面設定を行った。市民講演を聞いた後の高校生と祖母の対話からはじまり，図書館での調べ学習，祖母から贈られた本の内容を問う場面へと展開する流れの中で，日本思想史に関する知識を問うとともに，思想家の資料の読み取りや，資料をもとに倫理的な課題を論理的に思考する能力を問うた。問2だけが極端に正答率が低かったが，それ以外は標準的な正答率となった。「世界が再び平和から遠ざかろうとしている昨今にあり，意義深いテーマ」と評価された。細かい知識を問うものや難易度の高い問題があったという分析があったが，どの小問

も教科書をしっかり勉強していれば解けるようになっている。

問1は、日本の神々と災害の関係、折口信夫の「まれびと」論、柳田国男による古代の祖霊観、神観念を問うた。「きわめて平易」という評価があった。問2は、古代の仏教についての知識を問うた。古代前期での鎮護国家や後期での浄土信仰に至る基礎的な仏教史の流れ、鎮護仏教や浄土教の基本内容をおさえていけば容易に解けると予想していたが、正答率は倫理の全部の問題を通じてもっとも低かった。人物やその事項等の暗記的な学習ではなく、思想の大きな流れに沿った体系的な学習が求められる。問3は、江戸時代の儒教の知識を問う問題である。暗記だけでは解けず、教科書に従って江戸時代の儒教史を理解することを求めた。正答率はやや低かったが、「良問である」との評価や、「基礎的・基本的な知識を問う」が「正確な理解が求められる」とする評価があった。問4は、吉野源三郎の文章の読み取りを通じて、引用した文章を正しく読み取り、平和に関する倫理的な思考力を問うた。正答率は高かった。他国への敵対的態度の発生は、共同体内部の分断にこそ潜在的に看取できることを喝破した吉野の文章は、大問を締めくくるに相応しい。

第3問 「美を感じる心」をテーマとして、美的感性及び芸術の価値評価に関する高校生の意見交換と自己省察をとおして、美と芸術が様々な倫理的テーマと関係を持つことを理解し、それらの主題について思考を深めるよう促した。Ⅰの会話文では、絵画作品の対話型鑑賞を行った後の高校生たちが、芸術作品の価値評価について、相対主義の立場、普遍主義の立場、対話を通じた視野の拡張重視の立場に分かれて意見を述べ合い、Ⅱの会話文では、美を評価することが不平等の一因となるとするルソーの資料を読んだ高校生たちが、他者の美的評価自体を否定する立場、他者の個性を尊重する立場、他者の内面の美を評価する立場に分かれた。このように、それぞれの会話で主題について複数の立場を示すことで、「自分自身ならどの立場をとるか」を自問できるような構成とした。最後に、振り返りノートにおいて、他者の内面の美の評価が、他者の個性の尊重を要求するものであり、そのためには、対話を通じた視野の拡張が必要であるという見解を提示することで、第3問の諸主題の有機的連関が把握できるようにした。美的な嗜好や芸術の価値判断には、自分とは異なる他者に対する向き合い方が含意されているというメッセージを伝達することを目指した。「『倫理』の授業における探究学習の可能性を示す大問となっている」との評価をいただいた。

小問のうち、問1は近代西洋思想についての知識・理解を問う問題であるが、特定の思想家や運動と、それに関連するキーワードを結び付けるだけでは正しく解答できず、思想内容の正確な理解を要求するような問題の作成に努めた。そのこともあってか、問1では比較的正答率が低くなった。問1では「職業人」が意味するところのものが、受験者には難しかったようである。問2、問3では資料を提示し、その正確な読解を求めた。問2、問3では、資料の読解に加えて思想家についての知識・理解も問うことによって、複合的な形式の問題を作成した。ただし、問2は資料（カント『判断力批判』）の文章が短く、読解が容易であったためか、正答率はやや高くなった。また、選択肢の中で、カントについての知識・理解を問う部分と資料読解部分との関連が弱いとの評価をいただいた。一方、問3は資料（ルソー『人間不平等起源論』）及び関連する会話の空所を補う語句の正しい組合せを問う問題で、この出題形式のためか、正答率は比較的低くなった。第3問の趣旨を問う問4は、小問の中で最も正答率が高くなった。

第4問 なぜ人は後悔するのかという問題を考えることをとおして、反省的熟慮をする行為者としての自己の存在というものの輪郭を捉えられるよう、問題作成を工夫した。責任を問い難い「行為の境界事例」とも呼ぶべきものの帰結に対して覚える後悔は、不合理な苦痛の引き受けとして切り捨てられがちである。しかしながら、そのような単純な線引きをすると本質的問題が見過ご

されてしまいかねない。そこで本問では、登場人物がともに一つの問いに向き合い、哲学的な探求の手順を踏むことで「後悔」や「世界と自己の関係」といったものについての理解を深めるというストーリー展開を心掛けた。

大問の趣旨と特に関係が深い問題としては、問2(1)、2(2)、3が挙げられる。問2(1)は、後悔というテーマについて語る(2)の資料問題のテキストが、教科書でも紹介されているなじみの深い哲学者であるハイデガーの議論と関連性を持つということを示しつつ、思想についての知識を問う問題であった。この問題については正答率の低さから、時間切れにより受験者は選択肢を吟味することが難しかったのかもしれない。哲学上の用語を正確に理解できている受験者は確実に回答できており、一定の識別力を有する問題であったと考えられる。問2(2)は、大問の趣旨に即した現代の思想家に関して、資料の読み取り能力と思考力を問う問題である。問2(1)とセットの出題としたが、やはり教科書記述のない思想家の資料については、教科書上の知識と絡める工夫をするよという指摘をいただいた。問3は、大問の趣旨に即して、会話文を読み取りながら思考する能力を問う問題である。この種の問題では例年、正答率が高くなりがちであったが、本問では適正な範囲に収まり、大問全体についての理解と論理的思考力を問うという出題意図にかなう問題となったと言える。

その他の問いについては、問1は心理分野の思想家の主張や用語の正確な理解を問う問題であった。組合せを問う形式が功を奏し、正答率も妥当な範囲に落ち着いた。

第5問 生徒たちが、様々な団体・集団について調べているという場面を想定した。まず、前半(問1～2)では、国や地方公共団体を題材に、国家の概念、国家の役割(社会保障)について考察させる問題を作成した。問1は、マックス・ウェーバーの『職業としての政治』を題材に、国家の概念についての基本的理解を問う問題である。問2は、社会保障制度のうち、雇用保険・労災保険を題材に、財源の負担者や、それがどのような考え方で定められているかを考察できるかを問う問題である。問3は、日本国憲法における宗教に関する規定について、基礎的な知識を問う問題である。問4は、消費者団体訴訟についての知識を前提に、景品表示法及び特定商取引法にも消費者団体訴訟を導入した平成20年の法改正について考察できるかを問う問題である。問5は、日本における会社の出資者の法的責任や、企業行動の統制に関する基本的知識を問う問題である。問6は、改正前後の臓器移植法を手掛かりに、どのような場合に臓器提供ができるかに関するルールを考察できるか、それを表現できるかを問う問題である。正答率は、問1が最も高く、問5が最も低かった。問題全体の難易度は標準的であった。

第6問 経済成長とグローバル化に関する講義資料の目次を題材にして、その中の各キーワードに関する理解を問う問題を作成した。問1は、一国経済の規模を測る指標である国内総生産(GDP)が付加価値の総額であるということが理解できているかを問う問題である。問2は、国民所得の三面等価の原則を問い、GDPから国民所得(NI)を求める過程も問う問題である。問3は、独占、寡占、情報の非対称性、外部経済から生じる市場の失敗を理解できているかを問う基本的な問題である。問4は、公害問題に対する規制について、濃度規制と総量規制を適切に組み合わせることが、環境問題の解決において要請されていることを問う問題である。問5は、二国、二産業の仮説例を用いて、比較優位についての理解を問う問題である。問6は、冷凍野菜の輸入解禁が生鮮野菜の需要に与える影響を例として、需給曲線のシフトと需要の価格弾力性の変化に関する理解を問う問題である。正答率は、問4が最も高く、問6が最も低かった。全体の難易度はやや高かった。

第7問 国際社会における日本の立場と役割について、多面的に考え、探究する問題を作成した。国際社会に関する原理論から始まり、日本を取り巻くアジアの情勢、欧米との比較を経て、地球

規模での課題に関心を向ける、というストーリーである。その中で、アジアの人口大国への理解、日本の重要課題である ODA、宇宙といったテーマについても取り上げている。問1は、国際社会の特徴の理解と、「政治・経済」の授業で扱う古典の知識と内容の理解を問う問題である。問2は、現在の年齢別・性別人口構成から将来の人口動態を予想する問題であり、「人口ボーナス」や「人口オーナス」という生産年齢人口の状況を示す用語についての理解も問うている。問3は、日本の ODA と中国の対外政策についての理解を問う問題である。問4は、資料で紹介する宇宙条約の条文の読解を踏まえた上で、条約違反にあたる行為について考察させる問題である。正答率は、問2が最も高く、問3が最も低かった。全体の難易度は、標準的であった。

### 3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

「倫理」分野に関する評価・指摘等についての見解は以下のとおりである。

教育研究団体からは、「学習指導要領に準拠しつつ、高等学校で習得する知識・技能と習得した知識・技能を用いて思考力・判断力を働かせて問題を解いていくことをとおして、これから大学で学ぼうとする高校生が身に付けるべきものの見方や考え方を示している。この科目において学習する内容から偏りなく出題され、難易度も標準的である」との評価をいただいた。

高等学校教科担当教員からは、「資料の読み取りに基づいた思考力・判断力・表現力等や、包括的知識を問う設問が多く見られた。いずれの大問もバランスよく出題内容や出題範囲が取り上げられており、全体の難易度としては標準である」と高く評価されたことは、適正な作問への努力が認められたものとして肯定的に自己評価したい。他方でリード文についての工夫の必要などのご指摘については、今後の参考とし、良問の作成に努めたい。

「政治・経済」分野に関する評価・指摘等についての見解は以下のとおりである。

「昨年度同様、学習指導要領で求められる知識・技能を基に、それらを活用して資料等から課題を捉える設問や、複数の資料を読み取って、現代社会の諸課題を多面的・多角的に考察させる、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問もみられた」と評価された。

第5問は、市民社会を構成する団体・集団に関する問題である。この問題では大問全体の場面設定を行う導入部分を設けていないが、この点について「受験者としては、全体の導入部分を読む負担はないものの、最初に全体の場面設定を見通せず、各設問において場面設定を個別にイメージする負担が生じる点は、今後の課題である」との指摘があった。限られた時間内に解答しなければならない受験者の負担を配慮するという課題と整合する形でどのような出題形式とするかについて、指摘に留意しつつ、今後の検討を続けていきたい。また、問4や問6について「読解力のみで正答を導くことも可能である」との指摘があった。現代社会において重要ではあるが、高等学校の教科書で詳しく説明されていないテーマを取り上げる場合、問題中で文章資料等を示し、これを読み解いて正解を導かせるタイプの設問となる。その場合、資料を読み解いて考える思考力等を判断することになるが、このタイプの問題においても高等学校で学習した知識も利用する形になるよう、工夫を重ねていきたい。

第6問については、「講義中に配布された資料のテーマから知識・理解を問う設問だけでなく、提示された仮定を踏まえたり、基本的な知識を基にしたりして、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問もあり、全体としての難易度は標準である」と評価された。各設問のうち、問4については、「汚染物質を減少させる規制について、提示された仮定を踏まえて、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる、標準的な難易度の良問である」と評価された。また問6についても思考力・判断力・表現力等が必要な問題であるとの指摘があった。学習する知識の習得度とともに思考力・判断力・表現力等を問う問題の作成に努めていきたい。

第7問については、「テーマから連想される論点とそこからさらに連想されるキーワードを書き出してまとめた図は、『政治・経済』の授業にグループワーク等の活動を取り入れることで工夫するという授業改善へのメッセージ性が読み取れる」と評価された。

#### 4 ま と め

「倫理」分野についてのまとめは以下のとおりである。

問題としての安定性を重視しつつ、倫理的諸問題への関心を受験者に促すテーマを設定した。難易度においても、正答の確実性についても、適切な出題ができたと思われる。

教育研究団体からは、「高等学校での学びが大学での研究や真理の探究にどのように発展していくのかを見通す知性あふれるリード文がない」との指摘をいただいた。今後の参考にしたい。

高校生の学びの指針となるだけでなく、高校生へのメッセージとなること、教育現場における改善に資するような資料を活用することなどの課題を、更に充実できるように取り組んでいきたい。またその際、問題作成方針に沿いつつ、受験者に教科書で学習した基本的な知識を踏まえ、多様な資料を活用して考察させる質の高い問題を作っていきたい。

「政治・経済」分野についてのまとめは以下のとおりである。

「政治・経済」の問題においては、「昨年度同様、学習指導要領で求められる知識・技能を基に、それらを活用して資料等から課題を捉える設問や、複数の資料を読み取って、現代社会の諸課題を多面的・多角的に考察させる、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる設問もみられた」、「今後も現状の問題作成方針に沿った良問の作成を期待したい」との評価を受けた。読解力と学習した知識とを組み合わせることで正解を得る問題となるよう心掛けるなどして、より良い問題の作成を目指したい。